

「地域学」の時代

千葉俊壹

地域学創生

いま全国各地で続々と「地域学」を名乗る研究会が熱心な地元のオピニオンリーダーを中核として創生されている。

北は青森県の八戸市の「八戸学」から南は「沖縄学」に至るまで、すでに40近くに上っているようである。いずれは全国各都道府県に一つずつ創設されることになりそうな勢いである。

地元兵庫県下でも「但馬学」を皮切りにして「播磨学」「淡路学」「神戸学」「阪神学」「伊丹学」などが相次いで旗揚げした。

そして平成3年6月にはこれらの「地域学連合」ともいべき「ひょうご学」研究会が会長に新野幸次郎神戸大学名誉教授をいただき、神戸新聞情報科学研究所を事務局として新発展した。

そこで①地域学とはなにか、②その現状、③ブームの背景、④ルーツを探る、⑤21世紀への課題、などについて検討して見ることにした。

ご批判を賜れば幸いである。

グ・ローカル学

地域学は比較的若い学問なので、「これだ」といった定義はない、とあってよいと思う。ただこれまでの研究の経過を踏まえて、しいていえば次のような点が挙げられよう。

①単なるお国自慢をして自己満足するものではない

②「己れを知る」学問であり、それぞれの地域で「自分探し」をする研究である。

③視点としては「グローバルに発想し、ローカルに掘り下げる」あるいは「視野は広く地球大に、行動は地域の足元から」ということになる。グローバル+ローカル=グ・ローカルな切り口ですべての事象を直視するという立場である。

④座標軸で見るとタテ軸には地域に対する誇り、愛着、「自負心をすえる。そして市町村史などを掘り下げによって歴史的時間軸の流れをとらえる。一方、ヨコ軸には地域社会、日本、世界、地球への空間の広がりをとらえ、その中で「共存」「共生」「共創」キーワードとして位置付ける。そしてこのタテ軸とヨコ軸の交叉点に「地域学」の軸足を設定する。

⑤自分が住んでいる地域社会を客観的に分析して見直し、その魅力を再発見して地域の活性化に結びつける。合わせて研究会を生涯教育のための学習サロンとし、地域社会の人々の知的要求にしたえる「場」とする。

百花撩乱

全国の「地域学」研究会は正に次表のように百花撩乱といった姿で多彩な活動を展開している。

	団 体 名	〒	住 所
1	八戸学	031	八戸市柏崎1-10-44-701
2	東北学	980	仙台市青葉区本町3-8-1
3	東北学	024	北上市相去町相去21
4	山形学	990	山形市緑町1-2-36
5	いわき地域学舎	970	いわき市平北白土字西ノ内13
6	遠野学 トオノロジー研究学	171	東京都豊島区西池袋3-30-10 ライオンビル5F
7	小田急学会	160	東京都新宿区西新宿1-8-3
8	多摩学会	185	東京都国分寺南町1-7-34
9	江戸東京学	130	東京都墨田区横綱1-2-13
10	東京学会	162	東京都新宿区市谷加賀町2-3-16 ヤマトビル
11	川崎学	211	川崎市中原区新丸子東3-473-2 川崎市中小企業・婦人会館内
12	横浜学を考える会	221	横浜市神奈川区六角橋3-24-6
13	横浜学連絡会議	220	横浜市西区みなとみらい3-1-1
14	掛川学	436	掛川市掛川1141-1 掛川市役所市長公室
15	静岡地域学会	420	静岡市紺屋町15-4
16	信州学	381-02	長野県上高井郡小布施町福原11
17	名古屋学	460	名古屋市中区栄3-5-12先
18	淡海学	520	大津市松本1-2-1 滋賀県大津合同庁舎6F
19	大阪学	541	大阪市中央区北浜4-1-21 住友生命淀屋橋ビル5F
20	伊丹学	664	伊丹市4層1-1
21	播磨学研究所	670	姫路市山野井町84
22	但馬学研究所	667-11	兵庫県養父郡関宮町三宅369
23	淡路学の会	656	洲本市山手1-1-27
24	神戸学	651	神戸市中央区川崎町1-7-4
25	ひょうご学研究会	651	神戸市中央区川崎町1-7-4
26	阪神学	530	大阪市北区堂島2-1-5 サントリーアネックス1201
27	奈良学の会	630	奈良市東向北町25豊住書店
28	奈良学セミナーハウス	630	奈良市登大路町
29	奈良学文化講座	102	東京都千代田区一番町9-20-401
30	熊野学	640	和歌山市小松原通1-1
31	金沢学	920	金沢市小立野5-11-1
32	文化の中に潜む数学を探る会	920	金沢市観音町3-23
33	愛媛学	791-11	松山市上野町甲650 愛媛県生涯学習センター
34	伊万里学	848	伊万里市立花町1355-1
35	長崎学	852	長崎市三ツ山町235
36	長崎学	850	長崎市江戸町2-13
37	肥後学	862	熊本市水前寺6-18-1
38	沖縄学	102	千代田区富士見2-17-1

世話役を買って出ている事務局の性格から仕分けしてみると次のような姿が浮き彫りにされる。

- ① 地方自治体系
- ② 教育委員会系
- ③ 市民研究者系（個人系）
- ④ 企業系
- ⑤ 大学系
- ⑥ シンクタンク系
- ⑦ 財団系
- ⑧ 新聞社系

これらは横断的に全国的なネットワークづくりを行ない、相互に経験交流する方向へ動いている。

平成2年末に横浜で第1回の「全国地域学交流集会」が開かれた。また一昨年には掛川で第2回目の交流集会が行われている。

ユニークなカリキュラム

「地域学」のカリキュラムはそれぞれ大変ユニークなものが多い。

たとえば「神戸学」研究会の第1回公開講座では「ハイカラな町のルーツを探る」というのがメインテーマであった。

その切り口としては

- ① 神戸外国人居留地の四分の三世紀
- ② 雑居地の多様な顔－異質共生社会の原型
- ③ 異人館建築論
- ④ ハイカラな主役たち
- ⑤ 五感的居留地文化論

（牛鍋、ジャズからファッションまで）

第2回講座のメインテーマは「食は神戸にあり」というのであった。

- ① 世界の料理見本市
- ② こうべビーフの謎
- ③ 中国料理と神戸

- ④ パンケーキと港町
- ⑤ 水どころ、酒どころ
- ⑥ 神戸的食文化論

「但馬学」研究会では公開講座のメインテーマに「但馬のころ」を選んだ。

- ① 古代但馬との出会い－縄文のくらし、弥生のころ
- ② 中世竹田城のロマン
- ③ 但馬人気質
- ④ 芸術人生、但馬ごころ
- ⑤ 但馬杜氏のふるさと－芳醇、気質、伝統
- ⑥ 但馬の自然と人情

講座の開設に当たっては神戸大、神戸外大、甲南大、神戸学院大、姫路独協大、武庫川女子大、神戸山手女子短大、国立民族学博物館、関西学院大学などの教授連や神戸新聞の論説陣さらに神戸新聞情報科学研究所のスタッフが全面的に協力して、盛り上げたので、一般参加者も多数に上った。

また公開講座の内容は随時、神戸新聞の紙面を通じて発表するほか、単行本にまとめて発信している。

地域学ブームの背景

① 戦後50年、“東京一極集中”のシステムが政治、経済、文化、社会などあらゆる面にわたって定着してきた。この結果として中央と地方の格差はますます拡大している。

そこで、この傾向になんとか、歯止めをかけなければならない という各地域のオピニオンリーダーたちの止むに止まれぬ立ち上がりとその第一に挙げられよう。

② 具体例として横浜ではこのまま推移すると「東京都横浜区」のような格好になってしまう。

市民の主体性、独自性の崩壊につながりかねない。というので市当局や経済界が大いに市民各位に警鐘を鳴らした。

そこでその運動に共鳴する市民や大学関係者が立ち上がって「横浜学を考える会」や「横浜学連絡会議」を誕生させ、研究活動に入ったといわれる。

③日本の社会は全体として国際化、高齢化、高度情報化の激流に洗われ、非常なスピードで変化している。

この渦中で地域住民は心の座標軸を見失ないその方面性の発見に迷っている。そして前途に大きな不安感を抱き、ある種の閉塞感にさいなまれ、苦悩している。

④「地域学」研究会は生涯教育の拠点であり、「研究学習サロン」として地域社会の人々の心の寄りどころになっている。

知的欲求を満たす面で期待感が大きい。

地域学のルーツは藩校・郷学・私塾

江戸期から幕末にかけての日本は世界に冠たる「教育大国」であった。日本教育史資料によれば幕府の最高教育機関であった昌平坂学問所になって諸藩が設立した「藩校」は225校。「郷学」は118。「私塾」は、1,076。「寺小屋」は10,202に上ったといわれる。

かくして徳川時代を通じ蓄積された学問や教養の潜在的エネルギーがあったればこそ、幕末の日本は欧米列強による植民地化をまぬがれて明治維新に成功し、世界の奇蹟といわれた大飛翔をとけることが出来たといっても過言ではない。

そのように考えると「地域学のルーツは藩校、郷学であり、私塾である」という仮説が成り立つのではないだろうか。

「藩校」とは諸藩が藩士の子弟を養成するため

に設立した教育機関。

「郷学」とは庶民の教育機関、一つは藩主の一族や家老などの邸宅内に建てられた藩士の学問所。いま一つは領地内の庶民を教育するために藩主、または領主が設立したり、設立を補助したりしたものである。

このほか民間の有志が設立、経営したり、町民や村民により経営されていたものも多かった。しかし藩からなんらかの干渉や保護を受けていた。

「私塾」とは幕府や諸藩に仕えない学者が、自宅を教室として自らの信じる思想や学問を教えた学塾のことである。

私塾には漢学塾、国学塾、蘭学塾、算学塾、武芸道場、芸道塾などがあったが、大半は漢学塾であった。

教育方法は教師の人格教育で、教師は子弟と寝食をともにしたり、労作を行ったりして寺小屋より一段高い教育をしていた。

江戸期の私塾としては中江藤樹の藤樹書院伊藤仁斎の堀川塾が有名で儒学者を養成した。

中期には本居宣長の鈴屋など国学塾が起こってきた。平田篤胤の気吹舎（いぶきのや）などが後に続いた。

後期から幕末にかけては大槻玄沢の芝蘭堂、緒方洪庵の適塾、シーボルトの鳴滝塾などの洋学塾が盛んになった。

また吉田松蔭は松下村塾で久坂玄端、高杉晋作、木戸孝允、伊藤博文、山縣有朋ら明治維新の志士たちを育て上げ、その“震源地”になった。

兵庫県下の状況

〈藩校〉

元禄年間（1688～1703）姫路藩の好古堂、三田藩の造士館、柏原藩の崇広館、赤穂藩の博文館、安志藩の明倫堂、篠山藩の振徳堂など合計18校が

設立されていた。

さらに姫路、赤穂、篠山など7藩では印刷出版事業を行ない、各種の書籍を刊行、新しい知識技術普及の基盤となった。

教科は実学主義で、習字、習札、医学、和学、算学、洋学などで内容はかなり豊かなものであった。

〈郷学〉

享保2（1717年）年、摂津の平野郷に設立された合翠堂が先駆的なものとして知られている。元明年間、淡路で開設された益習館や明治初期に伊丹に出来た明倫堂のほか豊岡藩、出石藩、三田藩にも郷学が相次いで創設された。

〈私塾〉

江戸時代の後期から幕末、明治維新にかけて、100余に上る私塾が開設された。適当な教師がないところでは大阪の儒学者が出張教授を行ったり、塾長になったりしたという。

とくに池田草庵によって但馬の養父郡で開かれた青谿書院が有名である。浜尾新（東京帝大総長、文部大臣）久保田譲（文部大臣）進藤俊太郎（正金銀行頭取）ら錚々たる人材を輩出した。

〈寺小屋〉

兵庫県下の寺小屋は天明・寛政ごろに始まり、天保年間から幕末にかけて隆盛を極めた。とくに播磨地方に多かったといわれる。

明治4年の調べでは兵庫県下に818校の寺小屋があり、全国第5位にランクされている。1校当たりの生徒数は10名から100名程度であった。読み書き、そろばんが中心の教科で庶民子弟の教育機関。寺の僧侶が庶民の弟子に教えたのがその始まりである。

〈心学舎〉

庶民の成人教育機関。享保14（1729）年、京都の町人石田梅巖が始めた。

心学は神儒仏三教の思想を日常生活に即して説いた実践道徳である。梅巖はこれを庶民にわかりやすく説いた。

地元兵庫県には早くから講舎が設けられ、その数は20余に上ったと伝えられている。

明石の以善舎、姫路の明德舎、但馬関宮の敬忠舎、三木の典学舎が知られている。

心学は一種の生活哲学であり、処世の方法と心得をわかりやすく、説く点が藩の領民教化政策と合致したので広く普及した。

その教化方法も文字や理屈に頼らず、討論し合ったり、マンガを使うことなどをしたので、文盲の庶民にも浸透した。また商人に自信と励ましを与え、新しい“商人道”を説いた。

21世紀に向かったの課題

今年は地方分権の監視、提言機関である「地方分権推進委員会」が政府に対し、分権の道筋を示す「指針」の勧告を行なうことを予定するなど、地方分権が大きく飛躍する年になりそうである。

戦後50年を経て、制度疲労を起している地方自治システムの仕組みを変え、地域住民が参加して、住みよいまちづくりを目指す年にしなければならない。

分権の受け皿になる自治体や、それをバックアップする地域住民の器量が問われる。

こうした中央の改革への動きは「地域学」研究者にとって大きなはげみになるものと期待される。

21世紀を展望しながら「地域学」研究の課題について、いくつかの提言を試みたい。

第一は地域学の研究テーマにそれぞれの地域に根付いてきた藩校、郷学、私塾などの研究を取り入れることを提言したい。

郷土の先達があこの江戸期から幕末、維新にかけて、苦心惨憺、研究、開発してきたことの成果を

再発見、再開発して掘り下げる。そして現代的光りを当てることは地域学に深みと立体感を与え、重厚なものにするきっかけになるものと思われる。

ハワイ大学の助教授で「私塾」の著書のあるR・ルビンシャー博士は「江戸時代の私塾は封建的自閉の殻を抜け出て、自由闊達に遊学を行った若者たちを育て、近代日本を切り開いた数多くのリーダーたちを輩出していった」とプライベート・アカデミーの存在を高く評価している。

また同じく『私塾の研究—日本を変革した原点—』の著書である作家・竜門冬二氏は次のように語っている。

「私塾を開いた人たちは幕府の官学に対して私学、あるいは実学を主張、日々起こる事件をテキストにして、なぜこういう事件が起こるのか。政治が正しくないからではないか。しかし人間として政治に文句や不満だけをいっていても仕方がない。自分も考え、行動すべきだ。その時には必ず自分のことだけでなく他人のことや社会のこと、日本全体を考えて行動すべきだ。」

こうした観点に立つ学問をそれぞれの学者が独特の考えで後進に伝えるために塾を開いた。

松下村塾からは明治維新を実現した若者が輩出した。適塾からは新しい日本の進路を決めるための青写真を描いた人材が巣立って行った。私塾こそ日本を変革した原点だ。昔の学者たちは門人に何を教えていたのか。そして門人たちは何を受け止めたのか。そしてさらにそれを日本の社会でどう活用したのかということをつねにたずねてみるのも決して意味のないことではない。

第二は「地域学」研究会の横断的ネットワークを確立することである。

すでに2回程度、研究者による全国的な交流集会が開かれているが、まだまだ不十分であるといわねばなるまい。

産・官・学各界のバックアップの下に各研究会をパソコンネットワークの網の下に組み込み、その成果を時々刻々交換し合い、インターネットによって、さらに大きな体系にまとめて行く、そのシステムづくりを目指すべきである。

時代は地域から「マルチメディア革命」を起こす、“情報維新”前夜の様相を呈している。

地域から自分たち独自の情報を創造して全世界に向け発信し続けねばならない。

第三に「地域学」研究会は生涯教育のセンターとしても、一般にもっと開放される必要がある。

研究会に出ていつも感じることであるが一部の専門家だけの研究発表を一方的に聞くだけに終わってしまうことが多い。これではあまり意味がない。

会員が自由、活発に討論に参加できるよう、事務局は十二分に配慮すべきだ。また機関誌も一般会員に開放して大いに「発言の場」を提供すべきである。

それでないとな知的好奇心がだんだんと衰退してしまう。またときには史蹟めぐりなど野外活動も展開するべきだと思う。

第四に研究会が「まちおこし」の参謀本部的な役割りを果たすことがこれからますます期待される。

いま全国的に高度成長期やバブル景気時とはひと味もふた味も違う「まちおこし」の運動が起こっている。

これらを元気付け、請われれば研究会は各種のイベントの脚本書きから演出その他、あらゆる面について“知恵袋”になってもよいのではないか。

ここにも「地域学」研究会の存在価値があるように思う。

第五にこれからの研究会には知的機動力と構想力がなによりも求められる。

「ひょうご学研究会」は阪神・淡路大震災発生直後からその機動力を見事に発揮、国、県、市の

復旧、復興計画に多大の影響を与えた。

新野幸次郎会長の呼びかけに応じて70人に及ぶ大学教授や各分野の研究者、文化人など地域のオピニオンリーダー達が結集、神戸新聞情報科学研究所を事務局にして「ひょうご創生研究会」が組織された。

そして3月には「被災者の人間性回復のため緊急に実施すべきこと」をはじめ15項目にわたる提言を行なった。さらに6月には「住宅再建への多様なメニューと、的確な供給計画の策定」をはじめ10項目の提言を行なった。

また5月と6月にはパネルディスカッションを行ない、神戸新聞紙上で発表、各方面で大きな影響を巻き起こした。

震災を起爆剤にして、新野会長が提唱するように「安心・安全な都市・地域づくり」のための学際的な「総合災害学」の確立に向かって各大学の研究が進められていることも注目したい。

第六に21世紀を展望するとき地域学は国際化の方向に大きく飛躍して行くべきだ、と考える。

とくにアジア・太平洋諸国、諸地域との水平的連帯に発展して行くことが大切である。

たとえば「神戸学」の研究テーマに神戸と中国の革命家孫文との関係を大きく位置付けて見てはどうか。

大正13年11月28日、兵庫県立神戸第一高等女学校の講堂で孫文は「大アジア主義」について1時間半にわたり、熱弁を振るった。

その要点は次のようなものであった。

①世界最古の文化を持つアジア民族は、この数百年衰退し、ヨーロッパ諸国に侵略されたが、ここ30年来、復興してきている。日本が不平等条約を撤廃して独立国になったこと、そして日露戦争に勝利を収めたことがアジア諸国に独立の希望をもたらした。

②西洋の物質文明は科学の文明であり、武力の文明となってアジアを圧迫している。これは中国で古来からいわれている「霸道」の文明であり、東洋にはそれよりすぐれた「王道」の文化がある。王道の文化の本質は道德、仁義である。

③アジアを復興させるためには「大アジア主義」の下に、王道を基礎として、アジア諸民族の連合を図らねばならない。

④われわれが「大アジア主義」を唱えるのは王道を基礎として不平等を打破するためである。圧迫を受けているのは、アジア民族だけではない。あらゆる民族の平等と解放を求めるのが、われわれの「大アジア主義」の主張である。

⑤あなたがた日本民族は欧米の覇道の文化を取り入れると同時にアジアの王道文化の本質も持っている。日本はこれからのち、世界の文化の前途に対していったい西洋覇道の番犬となるのか、東洋の王道の干城となるのか、あなたがた日本国民がよく考え、慎重に選ぶことにかかっている。

この「大アジア主義講演」は約2,000人に上った聴衆に大きな感銘を与え、拍手はしばらく鳴り止まなかったという。

孫文は中日の提携を深く望んだが、軍国主義日本は逆の方向に進み、破局に陥った。

こうしてみると、この孫文の演説は日中友好の原点としても地域学研究の中で再評価すべきであろう。

参考

・財団法人 兵庫地域政策研究機構

「平成6年度調査研究報告」

・『私塾の研究』 童門冬二著 PHP文庫

・『革命家 孫文』 藤村久雄著 中公新書

・「ひょうご学研究会」機関誌

神戸新聞情報科学研究所より